

Museum News

Planning Office



絵：柳田 基

2010 秋

展覧会/講演会/公開研究会

展覧会

関西学院所蔵の絵画！

誰もやらないことをやれ！

—現代に受け継がれる吉原治良の精神—

▶ 詳しくは、4面をご覧ください。

講演会

「"スカ"から生まれるモノ」

講師：堀尾貞治氏（元具体美術協会会員）

聞き手：原久子氏（大阪電気通信大学教授）

2010.10.11（月）14:00▶15:30

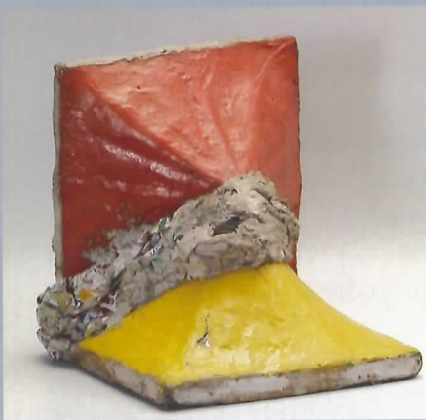
関西学院会館 2階 レセプションホール

〈入場無料〉

共催：美学会

関学出身のアーティスト吉原治良が主宰した

「具体美術協会」の会員となり、物質を生かすという〈具体〉の表現手段やパフォーマンスにこだわり続けた堀尾貞治氏を講師に迎え、現代に受け継がれる吉原治良の精神について語っていただきます。



堀尾貞治 〈無題〉

公開研究会

「金属工芸の小宇宙

—高精細画像でみる刀装具—

講師：川見典久氏（黒川古文化研究所研究員）

2010.11.13（土）13:30▶15:00

会場：財団法人 黒川古文化研究所

〈関西文化の日に参加のため、当日は入館無料〉

関西学院の歩みとその多彩な研究・教育の成果を公開する 関学コレクションをめざして

主役は、モノ

大学博物館は関学のシンボルともいえる時計台に設置されることが決まっています。ヴォーリズが設計した美しい時計台を活かし、この建物にふさわしい展示空間のなかで、125年に及ぼんとする関学の歴史と、そこから生み出された多彩な研究・教育の成果を公開して行きたいと考えています。

しかし、研究・教育の成果を博物館で展示するというのは容易なことではありません。博物館の主役は、モノ〈展示資料〉です。いくら立派な研究でも、理論だけでは展示はできません。説明パネルばかりを並べているのでは、学会のパネル発表になってしまいます。モノが展示されていないければ、本来の博物館機能を果たしているとはいえません。博物館にはその核となるコレクションが存在すべきです。核となるモノが何であるのかによって、博物館の特色が生まれるのです。

収集方針、決まる

関学の場合、核となるコレクションが存在するかといえば、明確にこれだと答えられるモノが少ないように思います。総合大学の総合博物館にありがちな問題です。そこでこれから関学の大学博物館として、どのようなモノを集めていくのか、以下のようにおおよその方針を立てました。

1. 関西学院に関する歴史史料およびキリスト教関係資料
2. 関西学院の教育研究活動の成果として展示できる資料および関連資料
3. 関西学院所蔵美術品関連資料
4. 美術品等のデジタルデータ

5. 西宮および京阪神の文化、芸術、歴史に関する資料
6. 学芸員課程実習用の資料
7. 新月文庫（教職員・生徒学生・卒業生の出版物）

以上の7項目です。かなり網羅的で、これでは核どころか、核分裂をおこしてしまいそうと思われるかもしれません。しかし、今は種をまいてる状況です。このうちのどの分野の芽がのび、花を咲かせるのか、コレクションは一朝一夕に成るものではありません。

新たに加わったコレクション

近年のコレクションとしては、2007年に蔵書票の収集家である原野賢吉氏より1万点を超える膨大な蔵書票のコレクションをご寄贈いただきました。全国的に見ても屈指のコレクションです。その一部はすでに2回の展覧会で紹介し、蔵書票ファンの間には関学の名が広がりはじめています。

また、同年には大阪勤労者演劇協会（大阪労演）が長年保管してきた公演ポスターや脚本、舞台写真など約1万点の寄贈を受けました。俳優座・青年座・文学座・民藝など新劇の劇団を誘致し、演劇鑑賞をおこなってきた大阪労演の資料は、演劇研究の一級資料です。こちらは目下、整理中で来年の秋に公開を予定しています。

このように新たに加わった資料とともに、学内に蓄積された数々のモノにスポットを当て、人とモノが出会い、知と感性が融合する博物館をつくっていききたいと思えます。どうぞ、全学をあげて、ご支援下さいますようお願いいたします。

（博物館開設準備室長 河上繁樹）

